

【五月の言葉（平成二十七年）】

もんぼう

聞法とは、ありがたい話を聞くのではなく

ありがたい事実をめざめるのです。

仏教の話の聞くとは、仏さまのありがたい話を頭や心で聞くのではなく、いま仏さまに生かされている事実をめざめるのです。我が身に知らされるのです。いくらありがたい話を何年も聞いても、我が身が問われなかったら生きる喜びや支えになりません。ただ話を聞いたただけで終わります。

いま生きている「いのち」は、生かされている「いのち」です。

自分で作ったものは何もあります。しかし人間は、自我が芽生える（めば）と「いのち」を自我で握り（にぎ）、私有化し、自分の「いのち」と錯覚（さっかく）しているのです。話を聞くことにより、生かされている事実を知らされるのです。人間は、往生するまで自我・我執（がしゅう）はなくなりません。往生するまで煩惱具足の凡夫（ぼんのうぐそく）です。① ② 仏さまは、その私たちを救おうと働き続けておられます。決して見捨てず必ず救うと誓っておられます。

そのありがたい事実気づかせていただくのです。

へ ① 煩惱具足（ぼんのうぐそく） ② 凡夫（ぼんぷ） ③ 煩惱に束縛（そくばく）されて迷っている人